

# 宇野浩二「屋根裏の法学士」論

——「何う云ふ風に社会に泳ぎ出すだらうか」

一

「屋根裏の法学士」は、大正七年十月号の教育情報誌『中学世界』に掲載された宇野浩二の短編小説である。習作時代を除けば、「二人の男」(『大学及大学生』大正7・8)に次ぐ、二作目に当たる。周知のとおり、宇野の名が知られるのは「蔵の中」(『文章世界』大正8・4)発表以降であり、よって、それ以前に執筆された本作は、掲載媒体が文芸誌でなかったこともあって、初出時にはほとんど注目されなかった。実質的に日の目を浴びるのは、単行本『蔵の中』(大正8・12聚英閣)に所収された後である。なお、主人公の名は(鈴木万作)だが、文庫版『蔵の中』(昭和14・8改造社)に再録された時点で改められ、「転々」(『文章世界』大正8・10)と同名の(乙骨三作)となっている。

その主人公の、どこか浮世離れた自堕落な生活がユーモアをもって描かれた点で、本作は、初期の宇野文学の特徴を窺わせる作品であり、それゆえ宇野の没後(昭和36)は、全集、著作集、アンソロジー等にはしばしば収められている。ところが、作品の研究

鷺崎秀一

状況は、同時期に書かれた代表作「蔵の中」とは比すべくもない。

宇野文学の研究が活性化するのは、水上勉『宇野浩二伝(上)』(昭和46・10中央公論社)や、洪川驍『宇野浩二論』(昭和49・8中央公論社)が上梓される昭和四〇年代以降だが、それでも、こと本作に関する言及はわずかである。『宇野浩二伝(上)』では梗概から記されているので、作品紹介も兼ねて引用する。

送金が止って生活に窮するようになり、故郷にいる母には毎月十五円送らねばならない。そこで、お伽話や翻訳などをはじめめるが、お伽話のタネもつき、翻訳の仕事も思うようにならなくなる。その苦境の有様を縷々と書いて、法学士でありながら「大人の小説」も書くようとしている乙骨が、毎日退屈なので下宿の押入れ上半分をかたづけ、そこに万年床を敷いて寝てばかりいる。やがて睡眠にも倦いてくると中学時代の幅飛びを思い出して、狭い六畳の部屋で飛び跳る。こういった筋の厭世観の濃い話である。<sup>2)</sup>

その後の研究では、小林隆久が「エミール・スウヴェストル Emilie Souvestre (1806—1854) の『屋根裏の哲人』(Un Philosophe

sous les Toits) (1850) がヒントを与えている」と指摘し、屋根裏を舞台とする先行作品と同様に「夢想から現実への覚醒を描いている」<sup>③</sup>としたのが昭和五八年、それを受けた田澤基久が「現実から離脱し、現実と夢を転倒し、現実を無意味化して夢の実存感を得するという宇野文学のパターンを定立した作品」と捉えたのが昭和六三年だが、そこから再び停滞する。平成以降では、薮際子と菅井九一郎とがそれぞれ異なるアプローチから作品分析を試み、手堅い研究成果を挙げている。

前者の薮は、本作が「宇野自身にかなり近い設定の無名作家が、『小説を書く』という行為に導かれる」<sup>⑤</sup>という点に着目し、「文壇への上昇志向を持てなくなった無名作家によって、現実と夢（この一部が小説を書くことであった）の拮抗を描き、結果的に文学の位置を相対化していた」作品と論じている。同時代文学そのものを批評した小説という観点は、これまでの研究に見られないものであった。一方、後者の菅井は、『中学世界』を枠組みとした視点から、作品に掲載誌への配慮があることを指摘した。そして、「基本的には「高慢」を中心に据えた滑稽譚であること、そしてそうでありながらも文学愛好者の目にもとまるよう、主人公の人物像が〈余計者〉と結びついた特殊なものにされている」と分析している。本作を「余計者」や「高等遊民」という近代文学史の系譜に位置付ける試みは、その見やすさゆえか、先行研究で盲点となっていた観があったものの、本論文はそれをカバーした。また、特殊掲載誌への目配りも評価できるが、読者がいかに解釈したかという点

では、この枠組みをまだ十分に活用しきれていない部分が見られ、追究する余地があるように思われる。

以上が主要な先行研究である。かく振り返ってみると、本作については、まだ手付かずの課題が残されていることに気付かされる。それは法学士に関してである。なぜこの時期に法学士の物語が書かれる必要があったのか、そして作品は、当時の読者に何を語りかけていたのか。作品名が「屋根裏の法学士」である以上、一個人の特殊な人格ではなく、法学士に集約される人物に焦点を当てた作品として読まれた可能性はなからうか。

本研究では、当時の法学士にまつわる言説を調査し、その文脈上に作品を置くことで、新たな解釈を探るものであるが、まずは本作がどのような作品であったのかを確認するところから始めたい。

## 二

はじめに触れたとおり、本作は『中学世界』という媒体に掲載された。発表媒体が、ときに作品の読まれ方を規定する場合がある以上、やはりこの点は重視されるべきであろう。先に『中学世界』という媒体に着目した菅井は、本作の構成に関して、次のように述べている。

ストーリーを見てみると、全体のかんりの部分が主人公の履歴の説明にあてられており、しかもそれは主人公がどのよ

うな学校を選び、どのような学生生活を送ったのかという、進路情報的なものとなっている。人物像がこうした情報を中心にして構成されることで、恐らく本作の主人公は、『中学世界』を通じて教養と受験知識を身につけ世に乗り出して行くとする読者にとって興味ある存在になっていると思われる。この点にも掲載誌への配慮が認められよう。<sup>(7)</sup>

なお、本作については、作者の宇野自身が、後年、作品掲載に至る経緯を述懐した文章を残しているのので、それを参照できる。

この小説は、その頃、江口渙くんから、雑誌は「中学世界」であるが、原稿料はすぐはらふから、書かないか、とすすめて、書いたものである。<sup>(8)</sup>

内容に踏み込んだ注文があったかまでは定かでないが、ともかく、本作が『中学世界』という媒体に出してしまったことは、作品解釈に少なからぬ影響が及ぶ。『中学世界』の読者層は、むしろ中学生である。

菅井によると、『中学世界』は「当初は中学生の教養涵養に重点が置かれていたが、受験競争の激化とともに受験関係記事の量が増え、一九一〇年代には受験専門誌の傾向が強くなった」<sup>(9)</sup>雑誌であったとされ、巻末には、ほぼ毎号、読み物が掲載されていた。そのうちの一作が「屋根裏の法学士」である。菅井は、雑誌に掲載された小説の傾向を分析し、それらの多くが「中学生・中学校、あるいはそれに近接する立場・場所を重要な要素として作品に組み込んでいた」と指摘し、学士を主人公とした本作は「例外」と位置付

けている。ただ、本作については、随所に「読者を鑑賞力の涵養途上にある中学生と想定しての配慮」を看取している。作者側の配慮の検証はさておき、気がかりなのは、その対象となる中学生読者についてである。はたして、実際のところ、当時の中学生に、本作はどのような作品として受け止められていたのだろうか。

当時、高等学校への進学を希望する中学生であれば、立身出世への思いは並々ならぬものがあつたと推測される。さらに、その先にある大学へと進学すれば、高等教育が受けられ、優秀な仲間たちと切磋琢磨でき、それ相応の未来が待つと信じられたはずである。

かような中学生の読者に、ましてや受験情報誌である『中学世界』を購読するような読者に、本作はどのように受け止められたのであろうか。鈴木万作のような学士の現実を見せつけられては、夢も希望もあるまい。

繰り返しになるが、本作が『中学世界』という媒体に出てしまったことは、必然的に読者層を限定し、作品の解釈にも制限をかけている。江口渙が本当に「雑誌は「中学世界」であるが、」と言ったのであれば、その断りは、文学に通じた読者の目には留まらないことを意味している。したがって、本作に関しては、たとえば、文壇諷刺や書くこと自体への批評というような次元の読みが成立したかは疑問が残る。よほどの文学愛好家でないかぎり、本作を読む中学生の脳裏に、いわゆる文学的な読みを作り出すコードは存在しないであろう。とすれば、あらためてこの作品が語りかけて

いたことは何だったのか。ひとまず、中学生の目線で素直に読めば、鈴木万作の自堕落な生き方そのものが問題提起されていると見るのが自然であろうか。

鈴木万作の半生を振り返ってみる。「少年の頃の彼は所謂秀才であ」り、父とは早くに死別するものの、周囲の支援から学資を得られ、なんとか高等教育を受けられるだけの環境に居た。言うまでもなく、周囲は、彼が「秀才であ」ることに期待していたのである。ところが、当人には恩義に疎いところがあるようで、高等学校の頃から「授業日数の三分の二位」の出席状況、大学進学後は「四年間に四十日程しか学校の門をく」らなかつた。従つて卒業の時の成績はびりから二番目」となってしまう。幼年期からの作家志望のため、大学を卒業した現在では、「大人の小説」を執筆する作家として身を立てようとしてはいるものの、自他ともに「根気と勇氣と、それから常識とが欠けてゐる」点は認められるところである。そのような彼ゆえ、一日の多くの時間を、下宿の「押入の、上の段を片付けて、そこに万年床を敷いて」、睡眠に費やし、結果が次のとおりである。

この一兩年來、彼は一層の貧乏に陥つた。翻訳の仕事も思ふ様でない。お伽話も種が尽きた。と言つて、文学の方の先輩を訪ねて、頭を下げて仕事を頼む事は、彼にとつては法律の方の先輩を訪問するのと同じ位好まなかつた。(彼はそんなにも高慢で、そして又内気な男であつた。)そんな訳で、自然母に送る金も滞り勝になつた。

#### 四

すでに指摘もありとおり、本作の前半はかような履歴および現況に、後半は夢の話に多くの紙幅が費やされている。それゆえ本作では、万作が行動する場面がきわめて乏しい。しいて挙げれば、夢で見た「飛行術」を実践し、滑つて転ぶ場面である。作中での、彼が好む居場所「屋根裏」にせよ「押入れ」にせよ、地に足の付かない場所ばかりだが、じつは夢までも飛ぶ話になっており、それは彼の極端に現実から遊離する志向を象徴するかのようである。

(これは面白い、そして、これは俺には実に容易な業だ。おや／＼、俺はもう松の木より高く飛んでゐるぞ。大勢の人が俺の下に見える。しかし、唯不思議な事に、余り人がこの俺の離れ業に感嘆してゐない事だ。が、今に分る、今に見ろ、今にこの俺の仕事が大したものだという事が分るから。おや、川の岸に出たな。なあに、川だつて、海だつて、同じ事だ。かまはず行け行け。そら、何でもない、川も越えてしまつた。)――

しかしこれは勿論夢であつた。飛躍を夢見てとはときに聞かれる文句だが、文字どおり飛躍の夢を見てしまうようでは仕方がない。つまり、本作では、万作が無為徒食の現状に至る道のりにまったく淀みがなく、それは自明の結果であることが示されている。秀才ではあるものの、人格的な形成は明らかに未熟で、しかもそれに対して作品が同情的かと言うとそうでもない。かような万作の生き様を、一笑に付して済ますことも可能であるが、ともかく未来を控えた中学生の目線から

すれば、反面教師として受け止めざるを得ないであろう。万作のようにならないように、と。

ただし、これはあくまで掲載媒体の性質に合わせた読解の一つである。本作が、教訓話や底の浅い笑いに留まっているのであれば、まさに文壇に打って出ようとした当時の宇野が、単行本に収めることはしなかったであろう。子供向けの童話の中にも、大人が読むに足る文学作品はいくらでも存在する。いったん『中学世界』という媒体から離れ、たとえば、当時の社会状況を意識して作品に臨んだ場合、なにか別の解釈が見出せる可能性はないのだろうか。今一度、本作の冒頭部に戻る。

法学士鈴木万作は大学を出てからもう五年になるが、未だに一定の職業をもたない。東京に来てから足掛九年になるが、彼は始めて来た時に住居と定めたまゝ、の同じ下宿屋（その間にその主人の代が十三度も変つた、）の同じ室に起伏してゐる。

さしあたり、同時代の視点で把握しておきたいのは、この冒頭部の冒頭に位置する「法学士」に関してなのである。

### 三

大学が数えるほどしか存在しなかった当時、法学士とは、東京帝国大学法科大学（または京都帝国大学法科大学）を卒業した者のことを指した。鈴木万作は「東京に来てから」とあるので、東

京帝国大学法科大学の卒業生である。この点は、当時の読者のほうが敏感であつたと思われるが、彼が、あらためて中途半端なエリートコースを歩んだ人物ではなかった点には留意したい。のりくらりと進行する語りに釣られてしまうと見過ごすが、本来、法学士とは世間に一目置かれる存在であつたはずである。では、文学領域では、この法学士が、どのように描かれていたか。

同時代の文学作品には、法学士を主人公に据えた作品がいくつが存在する。たとえば、岩野泡鳴「法学士の大蔵」〔中外新論〕大正7・4という小説がある。大久保典夫によれば、次のような梗概の作品とされている。

高利貸の息子で大学を出て就職運動をしている久野大蔵が、美人の妻に勝手なことをされ、あげくは骨なしといわれた赤兎に自分の独断で塩からい物を食わせ、ついに殺してしまう話である。（略）周囲から馬鹿扱いにされ、しかも何事かを妄信しているお人よしのドン・キホーテ的人物がここでも主人公になっている。<sup>(1)</sup>

この「法学士の大蔵」については、泡鳴自ら「有情滑稽を多分に含む作」の一つとして数えている。見てのとおり、「屋根裏の法学士」とは、主人公が法学士という設定以外にも、無為徒食で、かつ妄信的傾向にて滑稽を演出する部分に共通点がある。じつは、この数ヶ月前に発表された、永井荷風の「おかめ笹」〔中央公論〕大正7・1にも、似た造型の法学士が登場している。



翰は今年三十一、法科大学をば大抵きまつて一年おき位に落第しつゝ、漸くこの夏卒業はしたものの、むろん就職の口もなく今だにぶら／＼遊んでゐるのである。大酒呑のぼろッ買で、これまで通学中も再三女で手を焼く度毎いつも鵜崎に頼んで尻拭をして貰つてゐるのである。

つまり、大正七年前後は、なぜか似た造型の法学士が、繰り返して文学の素材となつた時期であつた。<sup>(13)</sup> むろん、法学士が近代文学に描かれるのは、この時期になつて初めてというわけではない。明治三五年に出版された内田魯庵『社会百面相』（博文館）の「犬物語」では、犬から見た人間社会が、ことに官吏や法曹としてその中枢を担う法学士が、揶揄の対象として手厳しく描かれている。

俺には解らないが、旦那のお咄では大学の学士で一番信用の出来ないのは法学士と文学士ださうだ。天下の学問の府と云はれる処の卒業生でありながら一番学問に不忠実なのが法学士ださうだ。華尾高楠先生なんかも法律万能を鼻に掛けて法律智識の有無を人物の標準と心得ておるが、高が五六十頁か其辺の筆記物の二十冊や三十冊や吞込んだ処で大人物とは恐入つたもんだ子。

動物目線から批評するという点では、同工異曲である夏目漱石「吾輩は猫である」(『ホトトギス』明治38・1(39・8)にも法学士は登場する。苦沙弥の教え子である多々良三平は、「卒業の日には浅きにも係らず堂々たる一個の法学士で、六つ井物産会社の役員」である。彼は天真爛漫な地方出身者だが、やがては、作中批判的に

六

描かれている金田鼻子と結婚するため、無垢に愛される人物としては造型されていない。また、同時期に書かれた二葉亭四迷「其面影」(『東京朝日新聞』明治39・10(12)の主人公小野哲也も「今年はいち三十五か六の中古の法学士。生徒の噂に依ると、この人の講義は乾燥無味で欠を誘ふ代り、義理明晰で曖昧な処がないと云ふ。尤も点が辛いので、余り人望はない。」という人物であつた。

さらに、「吾輩は猫である」からやや期間があくが、志賀直哉「無邪気な若い法学士」(『白樺』明治44・3)には、「僕なんか正月に三日休みが取れるきり、あとは年中算盤と眼玉をパチクリさしてゐるんだ」という三井銀行勤務の法学士が登場している。

かように明治後期にも、いくつかの文学作品にて法学士が描かれているが、彼らと、大正期の文学作品に描かれた法学士達とを比較した場合、その傾向に大きな違いが見出せる。前者の彼らは、その個性はさまざまだが、押しも押されぬエリートとして要職に着いた形で登場する。一方、大正期に描かれた法学士達が、そろって無為徒食であることを鑑みると、ここには明確な時代相が反映されていると考えざるを得ない。裏を返せば、明治後期には、無為徒食の法学士という発想が現実的でなかったのに、それが大正期になると、ひと昔前には思いも寄らなかつた無職の法学士が、たやすく想起される社会へと変遷していたのである。つまり、この大正期に文学作品が法学士を写し出すということは、少なからず現実社会への問題提起を孕んでいたことになる。実際のところ、法学士の何が問題となつていたのであるうか。

あらためて、かような視点から読み返すと、作中にも、どこか同時代の法学士に関する問題が意識されていた節が見受けられる。次は万作が、いかにして「法科に入る事になった」かが語られる場面である。

彼が中学を卒業した時、又一つの問題が起つた、といふのはSが、今度こそ是非彼に高等商業に入学を迫つたのに対して、彼は飽く迄文科に志すことを主張した、その間にいろいろの悶着があつた末、それではと（別に他から口をきく者があつて）中を取つて法科にと言ふことになつたのである。商科と文科との中を取つて、如何にして法科といふ計算になるか？——これは秀才鈴木万作にも分らなかつたが、兎に角学資を出してくれる親類の言ふ事を、それ以上曲げる事の不可能と不利とを悟つたので、彼は終にさうして止むを得ず法科に入る事になつたのであつた。

このとおり後見人の「S」は、万作が商科へ入学することを望んでいたのだが、万作は文科志望なので、なかなか首肯しなかつた。そこで折衷案として「商科と文科との中を取つて」法科案が出され、ともかくそれが法科を選ぶ理由となつたことが明かされる場面である。「如何にして法科といふ計算になるか？——これは秀才鈴木万作にも分らなかつたが」とあるように、あたかも小嘶のような、読者をくすぐる（笑い）を描いたとも受け取れる場面であるが、同時代の法学士に関する言説を参照すると、ここは、単純に万作の主体性の無さを（笑い）としているわけではなさそうで

ある。次の引用は、当時耳目を集めた芳賀矢一「法科万能主義を排す」（『帝国文学』大正6・10）という論文の一節である。芳賀矢一は、当時文科大学の教授職にあつた。

要するに輔弼の大臣から、下は刀筆の吏に至るまで、一切の国務政務の施行者、商事会社の事務担当者までも、法科出身者ならでは、其の地位を与へられぬといふ有様、専門の技術を要する官衙でも会社でも、之を経営し、之を指揮し、之を監督する役目は法科出身者に委ねられて居る。一言で言へば、法科万能といふ訳で、法科出身の要求は、社会の各方面に盛である。随つて、帝国大学を始め、各私立大学も皆多数の法科生を有して居る。

この見解をフィルターにすると、本作の先の場面は、暗に「法科万能」の風潮を茶化しているように受け取れる。当時、法科に入れば何とでもなるという風潮があつたとすれば、「これは秀才鈴木万作にも分らなかつたが、」という発言は、一種の皮肉である。「屋根裏の法学士」は、作品の語りが、全体的に万作の自堕落を強調しているため見えにくいだが、いかに腐るうとも万作は法学士である。くだんの理由から万作のような、いい加減な法学士が産まれる、その様が（笑い）の小説に描かれるだけならまだしも、もし現実の各所に目につくようになったら、いかがなものか。

なお、芳賀の「法科万能主義を排す」に賛意を示した者の中には、当時法科大学教授であつた吉野作造もいる。吉野は、芳賀の論文を次のように分析している。

『帝国文学』十月号にあらはれた芳賀文科大学教授の「法科万能主義を排す」といふ論文は著しく世間の注目を惹いた事は十一月の諸雑誌に之に対する多くの評論があらはれた事によつても分る。同教授の論文の中には已に二三評論家の指摘せるが如く多少の誤解と偏見とが交つて居り、且つ法科出身者の跋扈に不平を言ふに急にして、此論文の暗示する根本の大問題を如何に処理すべきやの積極的方面は欠けて居るに拘らず、斯くまで世間の耳目を聳動せるは、畢竟該論文が偶々世人の多年抱懷して居つた教育上の大問題に觸れて居るが為めであらう。<sup>(15)</sup>

この論文で、吉野は、芳賀が挙げた法学士の採用面や任用面などでの優遇への疑問については、「教授の憂る所は我々大いに之に傾聴する必要がある」と述べ、ほぼ全面的に賛意を示している。帝国大学の内部から声が挙がっていたところを見ると、世論形成も着実に進んでいた節が窺える。なお、吉野は、本論文にて、次のとおり、当時の法科人気とその課題も合わせて指摘している。

予輩は今日の天下の秀才が多く法科とか医科とかに集まり、文科理科の如き最も根本的な基礎学の方面に身を投じないといふ最近の著しき現象を耳にし、教授と共に其憂を同じうするものであるが、唯其原因の何れにあるかといふ事に就ては、教授の説の如く単純に説き得る問題ではないと考えて居る。

問題は、これらの言説が生まれた背景である。芳賀の「法科万能

主義を排す」が何の脈絡もなく書かれたのではない。先に見てきた、同時代の法学士たちの文学作品も同様である。おそらくこれらの背景には、当時新聞雑誌を賑わせていた、大規模な高等教育制度改革論議が存在していたのではないか。この論議は、「屋根裏の法学士」が書かれた大正七年になると、大学令(大正8・4・1施行)という形で結実しかけていた。

#### 四

大学令が公布されたのは、本作が発表された二ヶ月後、大正七年十二月六日であった。当時の『東京日日新聞』(大正7・12・6)によると、「第一、大学の目的を改めたる事、第二、従来の官立の外更に公私立の大学を認めたる事、第三、従来の総合大学の外に単科大学を認めたるがその主要点」ということであった。とくに本作の解釈にかかわる可能性があるのは次の二条である。<sup>(16)</sup>

第四条 大学ハ帝国大学其ノ他官立ノモノノ外本令ノ規定ニ依リ公立又ハ私立ト為スコトヲ得

第十条 学部ニ三年以上在学シ一定ノ試験ヲ受ケ之ニ合格シタル者ハ学士ト称スルコトヲ得

つまり、名前こそ「大学」であっても区分では「専門学校」であった私立の学校が、この大学令により、帝国大学同様の学士を輩出できるように改正されたのである。公布直後の『時事新報』(大正7・12・8)には「その内容は教育会議の決議を骨子としたるも



のなるが故に、既に世間の議論を尽きたる所」と見えるように、ここに至るまでの議論が、前年九月二日に設置された臨時教育会議にて行われていた。明治後期から学制改革の必要は叫ばれていたものの、方々の利害関係が絡む案件はなかなか進展せず、大きく動き出すのは、大正四年八月、第二次大隈内閣に、早稲田大学学長であった高田早苗が文部大臣として入閣した後であった。

当時の『報知新聞』(大正4・9・21)には、新大学令の要綱案が発表される前日、高田が、早稲田大学で挙行された新旧学長の就任告別式にて「我が早稲田大学をして国家から名実兼備の大学として認めしむる考へである」と述べたことが報じられている。

前学長たる高田文相は瘦身を演壇に運んで曰く「自分が三十有年の間一日の如く勤務した本大学を去り大隈内閣の一人として文相の椅子を辱むるに至ったのは大隈伯の知遇に感じたる為であるは勿論ながら自分にも又聊か抱負があり入閣したのである、今日迄早稲田大学は大学の名称を冒し来つたが国家では未だ大学たる実を認めない、此官私の区別を除いて我が早稲田大学をして立派な一大学たらしむるには学制改革案の決定を待たねばならぬ、自分は必ず学制案を改革して我が早稲田大学をして国家から名実兼備の大学として認めしむる考へである。之れ自分が学長の職を辞して入閣した一因である」と述べて壇を降る。

つまり、大正の高等教育制度改革は、いわば早稲田閥の主導によって推進された面があるのだが、早稲田といえは大正二年まで

在籍していた宇野の母校でもあり、その点は留意されてよからう。また、当時の宇野との関連でいえば、雑誌『大学及大学生』も見逃せない。本誌について調査した浅沼薫奈は、次のように述べている。

刊行時期から推察されるようにこの雑誌は、教育調査会・臨時教育会議等の高等教育制度改革論議を背景として創刊され、特に大学令(勅令388号・1918年12月)を大きなイッシュューとして取り上げた。日本の近代大学史として、この時期は「大学の拡張、高等教育の門戸開放によって特徴づけられ」、「第二次世界大戦後の新制大学成立への重要な歴史的な前提となった」と言われている。<sup>1)</sup>

『大学及大学生』には、「屋根裏の法学士」を発表する数ヶ月前に「二人の男」(大正7・8)という作品が掲載されている。「二人の男」は、後に代表作となる『苦の世界』(大正9・5聚英閣)の第一・二節であり、なにより習作期を除けば、宇野の実質的なデビュー作であった。よって、雑誌そのものはもちろん、一連の高等教育制度改革も宇野の視野に入っていた可能性は否定できない。

では、この論議であるが、当時のメディアは、どのように報じていたのだろうか。まず『大学及大学生』であるが、創刊時期から察せられるとおり、政府の方針に反対であろうはずがない。その創刊号(大正6・11)の巻頭「時評」欄には、この度の制度改革を歓迎する記事が掲載されている。

学校殊に専門学校乃至大学の増設、大学教育普及事業の拡

張はこの真理によりて人類のための一大福音である。然るに、咄、何者の愚人ぞ、高等教育の普及は徒食懷手の高等遊民を増加するに過ぎずとなす、その愚や実に度し難いのである。<sup>(18)</sup>先に触れた芳賀や吉野も、個人的見解ながらも、本制度改革に一定の理解を示していたのは見てきたとおりである。大隈内閣は短命で倒れるが、次の寺内内閣が重要課題に挙げたことで、積年の教育行政課題は実現を見る。この間、制度改革に反対する声は高まっていない。じつは、その背景には、高等教育への進学希望者が急増していたという事態があり、その受け皿として、現実的に大学や高等学校の拡張は急務であった。当時の『読売新聞』には、次のような記事が掲載されている。

高等なる学校に入らんことを志望する者の多きは慶すべきや將た憂ふべきやは別問題として、志望者の益多くなるは事実にしてすらく入校する能はざる者の夥しきも亦事実なり。而して是より生ずる害の多大なるを思ふときは、余り議論に耽けり居る秋に非ざることに気が附くべき筈なり。何は兎もあれ先づ此多数なる志望者の大部分の捌きを付くるに必要な措置を執りて然る後、静かに高くして且つ細かなる専門的研究は、専門家が成し得るの道を開くこと可なり。(略)但し高等遊民が此上増加せんことを恐る者あり。一応尤もなる考へなり。然るに官庁に於ても商工業会社に於いても人材の欠乏を訴へざるなし。<sup>(19)</sup>

社会に目を向けると、当時は第一次世界大戦を経て、時勢の変

化に対応できる人材が求められた時期でもあり、企業も幹部候補生として学士の受け入れが本格化した時期でもあった。大正六年二月の『朝日新聞』にも、「新法学士一千名の捌け口」という記事が見える。

新法学士たる可き卒業生が一千名と云ふ新記録で、此多数の法学士が何う云ふ風に社会に泳ぎ出すだらうかと云ふ事は学界の一問題となつて居る殊に昨年末頃から例に依つて帝大の揭示場には『新学士招聘○○名』と云つた様な揭示が掲げられて学生連の胸を轟かせて居る、是等の学士招聘の揭示の中で最も彼等の視覚を驚かしたのは住友銀行の四十名採用と云ふので、新聞や雑誌で二百万円賞与金とか銀行株を貰つとか云ふ事が若い人々の血を湧き立たせる。<sup>(20)</sup>

右にあるとおり、「此多数の法学士が何う云ふ風に社会に泳ぎ出すだらうかと云ふ事は学界の一問題」であったことは興味深い。この年は大戦景気で、進路についても楽観的な雰囲気が漂っているが、一方で、この報道の翌年の夏、つまり「屋根裏の法学士」が書かれた大正七年は米騒動が勃発しており、社会の先行きは誠に不透明であった。

また、いくつかの資料の中には「徒食懷手の高等遊民を増加」させるという危惧の声も散見する。法学士の一等目標とされた高級官僚のポストには限りがあり、法曹界もまだ待遇が悪かったことで敬遠されるという見解もあった。<sup>(21)</sup>もし万作のように気位ばかり高く、民間企業への就職もよしとしない法学士が増えれば、無為

徒食の者が世に溢れる懸念は拭えなかった。というのも、高等教育を受けられる若者は資産家の子弟である場合が多く、また当時、すでに「大学」と改称していた私立専門学校のうち、その多くは法律学校を母体としていた。社会に学士が増えると思えば、なかでも法学士は増加が見込まれていた。

かような背景を念頭に置いて「屋根裏の法学士」に臨んだとき、はたして本作は何を語ろうとした作品と映るであろうか。むろん、エリートをこき下ろすような低級の滑稽小説であろうはずがない。中学生にも理解できるほど露悪に、一人の法学士の日常が描き表された本作は、今後、学士が急増する社会に対し、一石を投じた作品として映ったのではなからうか。

## 注

- (1) 宮島新三郎「本年度に於ける創作界総決算」(『新小説』大正8・12)には次のとおりある。  
四月「蔵の中」を文章世界に発表するや、氏は一躍文壇の寵児となつた。
- (2) 水上勉「宇野浩二伝(上)」(昭和46・10中央公論社)
- (3) 小林隆久「夢見る部屋」の系譜—宇野浩二とボオの文学における室内空間—(『外国文学』昭和58・3)
- (4) 田沢基久「宇野浩二初期作品の検討—二人の話」から「蔵の中」まで(上)「(国語国文学報」昭和62・11)
- (5) 藤際子「書くこと」をめぐる小説—宇野浩二「屋根裏の法学士」『転々』(『淵藪』平成11・3)
- (6) 菅井九郎「宇野浩二「屋根裏の法学士」について」(『成蹊国文』平成25・3)
- (7) 注6に同じ。
- (8) 宇野浩二「あとがき」(『蔵の中・子を貸し家 他三篇』(昭和26・6岩

波書店)

(9) 注6に同じ。

(10) 潮木守一「解説」(『斬馬劍禪「東西両京の大学」』昭和63・10講談社学術文庫)には、次のとおりある。

当時、大学といえば、それは帝国大学令に基づく東西両京の帝国大学に限られていた。しかもこの帝国大学は明治政府公認の大学であるばかりではなく、あまたの特権が与えられていた。なかでもその法科大学には、文官高等試験の予備試験免除、判事検事登用試験第一回試験免除、弁護士試験免除という、当時東京に群がり集まる多数の法律書生にとっては、羨望の的ともいべき特権が与えられていた。とくに高級官僚への登竜門とでもいべき文官高等試験では、合格者の七割は東大法学科の出身者で占められるという具合に、高級官僚への道はほとんど東大に独占されていた。

(11) 大久保典夫「有情滑稽物について」(『岩野泡鳴の時代』昭和48・2)

(12) 「法学士の大蔵」は、掲載翌年に刊行された単行本「猫八」(大正8・5玄文社)に所収される。本書に付された「はしがき」には、「特に有情滑稽を多分に含む作を収めた」とある。

(13) とくに宇野は、この後も「転々」(『文章世界』大正8・10)、「或法学士の話」(『太陽』大正9・12)と、毎年、法学士を主人公に据えた作品を発表し続けた。

(14) 執筆時(明治42・2)は、「若い銀行員」という題名だが、発表時に改題された。

(15) 吉野作造「所謂排法科万能主義によつて暗示せられたる三大時弊」(『中央公論』大正6・12)

(16) 大学令は本作掲載後の施行であるので、念のため、事前に報道された、「六月廿二日教育会議にて決定せる大学案」(『大学及大学生』大正7・7)を参照すると、「大学は官立及財団法人の設立とすること但し特別の事情ある場合に於ては公共団体の設立を認むること」とある。帝国大学が独占してきた「大学」の規制緩和は、計画どおり実施の運びとなったが、実際に公布された大学令には「私立」や「学士」などの具体的な文言が見られるため、当初案より、さらに改革色が打ち出されたものとなっていた。

(17) 浅沼薫奈「橘静二と『大学及大学生』—大正期にあらわれた新しい大学論—」(『大学教育学会誌』平成17・5)。引用中の引用文は、寺崎昌男「高

等教育の発展」〔日本近代教育百年史 5 昭和 49・3〕による。

(18) エマジ「時評」〔大学及大学生〕大正 6・11

(19) 「教育調査会(一)」〔読売新聞〕大正 6・11・23

(20) 「新法学士一千名の捌け口」〔東京朝日新聞〕大正 6・2・9。なお、本年は、先行実施された大学制度改革(卒業年限の短縮)の影響で、とくに卒業生が多かった。

(21) 「法科万能主義(中)」〔日の出新聞〕大正 6・12・5)には次のとおりある。

但し今日の如くに司法官の官吏としての待遇厚からず、学校の成績の優れないために実業方面にも、高等文官にも赴き難い者の外に志望者の無いと云ふやうな事では駄目である。

(22) 「大学及専門教育改善案(下)」―教育会議の答申書」〔読売新聞〕大正 7・7・13)には次のとおりあり、すでに法科の専門学校が多い点には留意されていた。

現在専門学校令に依る私立学校にして大学と称するもの、中に於て最も多きは法政に関するものなり我国の如く多数の法政に関する学校を一都会に集中せるはほかに殆ど其の比を見ざる所

(二〇一七年十一月二十四日掲載決定)